

## 名誉会員 八木健三先生の 思い出コーナー



八木先生が2008年7月18日に亡くなられ、9月6日に「お別れの会」が開催されました。協会会報NC139号(10月発行)に後会長と佐藤会長のお別れの言葉を掲載いたしました。

お別れの会の折、たくさんの方からお別れの言葉を述べたいとお申し出がりましたが、会場使用時間の関係でやむなくお断りいたしました。その後、協会会員等から先生を偲ぶ声をどこかに載せてもらえないかとの声が聞こえてきました。

そこで会報NC139号で先生の「思い出、エピソード募集」を呼びかけました。その後、何人かの方にも呼びかけましたところ多くの方から楽しい思い出やエピソードをいただき、やっぱり八木先生ならではのつながりが良くわかりました。思い出などを寄せてくださいました方々にはここでお礼申し上げます。有り難うございました。

いただいた「思い出」を順不同で掲載させていただきます。

会誌編集担当一同

## 鰭脚類保全に協力してくださった八木先生

京都大学霊長類研究所共同利用研究員  
和田 一雄

一九七三年から、道東で繁殖するゼニガタアザラシが集中して獵獲され、地域的絶滅に瀕していたのを、海獣談話会が注目して保全する運動を始めた。紆余曲折があったが、保全の研究と運動を継続して一九八五年に札幌で日欧米の研究者、被害を受けている漁業者、自然保護NJOを招待してシンポジウムを開催するところまでこぎつけた。その過程で、根室、釧路、十勝、道南各自然保護協会との協力を受けてなんとか継続してきたのだが、北海道自然保護協会の協力をいただくべく、同協会に伺って八木会長にお会いしたのが最初であった。シンポでの閉会の辞を先生からいただき、懇親会では欧米の研究者とも懇談をしていただき、情報交換で盛り上がった。その後、トド

の漁業被害問題が起き、そのつど相談にのっていただいた。知床半島の世界遺産では周辺海域での鰭脚類を含めた漁業対応などにも言及できた。

八木先生が長野出身であったことを知っていた、私は長野県の志賀高原で長いことニホンザルの生態調査をしていた関係で、一度地獄谷温泉の後楽館においていただき、一晩ゆっくりとお話できたのであった。

愛知県犬山市にいる私としては、いつもお会いできる立場ではなかったが、何か北海道の保全のこととお願ひするようなことが起こると先生のことを思い出す存在であった。お亡くなりになったことは大変残念であるが、先生の遺志を継いで少しでも自然保護に貢献したいものである。

(二〇〇八、一一、七)



## 八木先生の思い出

北大ワンダーフォーゲル部OB会会長  
横須賀 英司

八木先生には、井出先生から引き継がれた一九六七年の夏から、久田先生にバトンタッチされた一九七八年三月北大を退官されるまで、北大ワンダーフォーゲル部六代目顧問として一年間現役を指導していただきました。その間は部の発展期であり、部員数が最も多い時期でした。現在OB会員は六〇〇名を超えましたが、先生に直接薫陶を受けた部員は三〇〇名近くになっています。また北大を退官後もOB会の活動に、本当に直前まで積極的に参加していただきました。ニセコでの冬合宿、東京・札幌で毎年開催しているOB総会等会の行事には、いつも先生がひな壇に座っていてくれていました。その場での先生の特別講義を皆楽しみにしていました。

ワンゲルの現役部員は現在でも「八木基金」にお世話になっています。これは一九七八年春、先生が退官で顧問を降りることになったとき企画され、八月に出版となった画文集「私のワンデリング」の売り上げ余剰金を、有効に使う方法として先生が提案されたワンゲル独自の基金です。最初の利用者は、一九八〇年創部二五周年の年に実施されたインド・ヒマラヤZ1遠征に参加した、現役部員でした。その後は主に一年部員が部活動に必要な山装備を購入する資金として、現在も脈々として活用されています。

二〇〇五年九月、ワンゲル創部五〇周年の記念式典が「八木先生お別れの会」と同じ後楽園ホテ

ルで開催されました。三三〇人を超えるOB・現役が全国より集合したのですが、その時の主役も先生でした。同時に発刊した記念誌「道標」に一番多く登場しているのも先生です。直接寄稿していただいたのはもちろんですが、先生のスケッチ、行事の写真・寄せ書き、そして多くのOBより寄せられた原稿にも先生のごことが満載されています。この年は、先生が情熱を注いだ知床が世界遺産に登録された年でもありました。

先生から直接講義を受けることはもうできませんが、八木基金を通じて現役部員はこれからもずっとお世話になることになります。我々北海道の自然と北大ワンゲルを愛するものに、実直に生きるこの大切さと、心温まる多くの素晴らしい思い出を作っていただいたことに、心から感謝しています。



1981年1月ニセコ五色温泉におけるOB合宿にて

## 八木健三先生へのご報告

加藤 幸子 作家

先日、ある大学の環境文学専攻の学生さんたちと一緒に、東京港野鳥公園に出かけました。冬日には珍しい暖かい日とで、鳥たちとのんびり過ごしてまいりました。

蓑笠姿の釣師のように水辺にたたずむアオサギたち、黒い傘を広げるように翼を干しているカワウたち、そして北国から渡来した数多くのカモの仲間たち。最高の出会いは、高木の枝や拡声器のポールの上からそれらをうかがっている数羽のノスリでした。生息園ではシロハラが林床をひっそり歩いていましたよ。

本来ならば悼む言葉から始めなければならないのに、こんな情景をまず亡き先生にお伝えする非礼をお許しください。実はずっと以前、お約束しながら実現できなかったことが、ずっと私の胸にかかったまま、先生が逝かれてしまったからなのです。

八木先生とは、北海道自然保護協会の会長職に就かれたところ初めてお目にかかった、と記憶しております。前大学教授とは信じられないほど熱烈に、北海道の自然環境を守ろうと奮闘されていたね。自然破壊の危険をもたらす相手に、まっすぐ、粘り強く物言うお姿に、私は市民運動をしていたころの自分を思い出し、東京港野鳥公園成立の経過を延々と話したのでした。そのとき、先生は埋立地に生じたこの自然公園をぜひ訪ねた

い、と望まれ、私は必ず一緒にします、と約束したのでした。

しばらくたってふいに電話を下さいました。明日、東京に出るのですが、加藤さんはご都合つきますか？と。突然のことと、私は時間を作るのができませんでした。申しわけありませんが別の機会に、と言ったような感じがします。後でうかがうと、八木先生は当日一人で野鳥公園に行かれたそうです。もちろん誰にとっても快く過ごせる場所ではあっても、熟知している私が同行して説明すればもっと興味深かったでしょうに。この出来事がありましたので、冒頭に報告させていただきます。八木先生、あのときはごめんなさい。

先生との交流の機会はそれほどしばしばあったわけではありませんが、私の祖父が鉱物学者でその名もご存知だったことから、何となく先生を身近に感じておりました。

またいつぞやは藻岩山のお宅にお招きいただきありがとうございました。あのときは奥様も一緒に、景観を楽しみながらお茶菓をいただきました。たしか紅葉が山を彩っていたころだと思っています。

八木先生は北海道の自然を守るために、ほんとうに大きな足跡を残された方でした。遠い大都会に住みながら、生地を自然を想うことの多い私にとっても大切な方でした。

八木先生、長いあいだお疲れさまでした。どうぞ安らかに休みください。

# 名寄での自然観察指導員講習会の思い出

(財)日本自然保護協会  
開 発 法 子

八木先生に初めてお会いしたのは、一九九一年八月、名寄市のピヤシリで開催した自然観察指導員講習会だったと思います。もう一七年も前のことで、その時だったか、後日だったのか定かではないのですが、今でも思い出すのは、登山帽をかぶった八木先生が、岩山の上で周りの風景を見ながら、ご自分で描いた山の絵も使って、地形の成

## 八木 健三さん

(元北海道自然保護協会会長)  
7月18日死去 93歳



「健三、おや、お口開ながら、自然を愛する胸の熱いお話を聞かせてください。八木健三さん、一九〇九年六月、

## 知床守った覚悟の判断

「君子豹変す」という言葉で補正した後の会長の健三さんがある。ふつと、団体の長が組織の法を突然変異させる。信譽を失う。八木健三さんは自然保護の世界的で有名な「知床」を守った覚悟の判断で、八木会長は各団体の「無敵、無敵の人。彼な

北海道新聞 2008 年 8 月 30 日(土)掲載

り立ちを教えてください。水を得た魚のように生き活きと話をされている風景が浮かんできます。

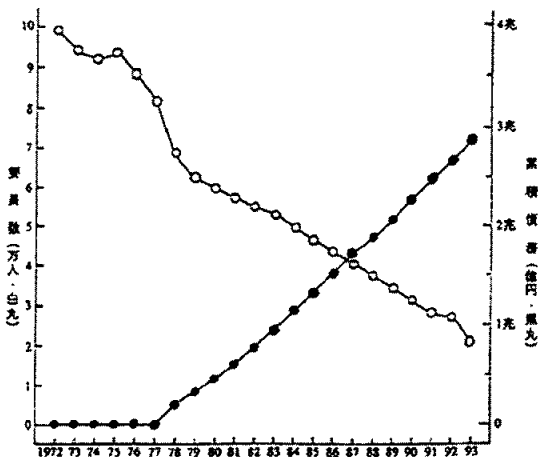
当時、私は自然観察指導員養成の担当で、各地で開催する講習会の運営を行っていました。北海道自然保護協会と共催する講習会は、いつも「日本自然保護協会からの講師は金田平さんにしてね!」と、熱烈なご指名が入りました。そのことを金田先生に伝えると顔から頭まで赤くして満面の笑みで「そうかい、しょうがないなあ」「北海道は、八木さん、俵さん、鮫島さん、三浦さんといった講師がいるんだから、ボクが行く必要ないじゃないの?」と言いつつも、「飛行機とか決まったら教えてね」と行く気満々で喜んでいました。

北海道に着き、八木先生、俵先生、鮫島先生、三浦先生と金田先生との再会は、まるで一緒に野山を駆け回り信頼しあった友人が久しぶりに会ったかのようなでした。北海道の講習会では受講生、講師、スタッフでの交流をとっても大事にしていって、ピヤシリでは長い木のテーブルを一〇〇人近い参加者が囲み、交流を深めたことを思い出します。そんな場で、八木先生、金田先生をはじめとする経験豊かな講師陣の自然に対する深い知識と深い、自然保護への情熱を知ることができました。こんな先生がたの思いに触れたことは、今でも、なかなか思ったとおりに進まない自然保護問題に取り組むときの私の心の支えになっています。自然のことを話すときの八木先生の少年のようなまなざしは、きっとこれからの未来を見据えていたのでしょうね。

## 八木先生とともに報告

日本の森と自然を守る全国連絡会世話人代表  
笠原義人

八木健三先生は、一九九一年、奈良市で開催された日本の森と自然を守る全国連絡会(日本の森連絡会)の設立総会において初代会長として就任以来、二〇〇二年に至る一一年間の長き亘り、会の代表をお努めになられました。八木会長は、第五回全国集会(一九九二年、米沢市)では現地報告「千歳川放水計画の問題点」、第八回全国集会(一九九五年、徳島市)では講演「北の自然を守る」、第一〇回全国集会(一九九七年、熊本市)では分科会報告「北海道二つの闘い―士幌道路と千歳川放水路」、そして第一一回全国集会(一九九八年、穂高町)では分科会報告「大雪山のナキウサギ裁



国有林野事業における死の十字

資料: 八木健三・笠原義人「生態系重視の林業を」(『サステイナブル・ソサイエティ全国研究交流集会記念論文集』、p.122、1994 年より)



声を掛けられませんでした。先生は地質鉱物学科関係者にはずいぶん多くの人たちに入会を勧めていたので、どうしてだったのだろうと今でも思っています。

いささかなりとも、自然保護活動の手助けをし、先生のご好意に感謝し、ご遺志に添いたいと思います。

写真は二〇〇〇年に我々地鉦同級生が卒業三十五周年の集いを行ったおり、先生にも「同期生」として出席していただいた二次会のときのもので



## スケッチブック

自然環境研究室主宰  
鮫島 惇一郎

「歩々の会」という素人画家の集団があります。一九六二（昭和三七年）年の初夏、長い間、十勝で苦勞された坂本直行さんの音頭とりで、自然のなかで、美しく絵を描こうという会が生まれました。

その年からもう四七年ほどの月日が流れました。短くて長い会の歴史ですが、その間いろいろな出来事があります。設立の発起人であり代表を務めた直行さんが一九八二年、目覚めることのない眠りにつかれました。三〇歳だった若者も、いまでは八〇歳ではありませんか！ しかし会は現在でも受け継がれております。

昨年は四六回の「歩々画展」です。その一角に、故という文字が付いた二名の会員の名がありました。お一人は八木健三先生、もう一方は竹内義友さんといいました。会は主要なメンバーを失ったことになりました。

八木先生は、発会当初からの会員ではありませんでした。確か二年目から入会されたように記憶しております。会には一年に数回のスケッチハイク（ハイキング）が予定されておりますが、その折に、先生の入会のきっかけを伺ったことがあります。

支笏湖周辺の地質学「巡検」のとき、山の絵を描いている方に出会ったのです。その描き方を覗いてみると、山の描写の的確さと、そのタッチの速さに驚かされたといわれるのです。その方

に、恐る恐る声をかけると坂本直行さんだと解り、絵を描くんだったら「歩々の会」に入ったらといわれたとか。以来、八木先生は欠かさず毎回画展に出品されておりました。

今回の四六回画展に飾られたのは、絵が三点とスケッチブックが六冊でした。その一つ「ナイヤガラフォール」は、是非譲って欲しいとの申し出でが沢山ありましたが、これはできない話です。絵の下に並んだ六冊のスケッチブックの前に来られた方は、丹念に頁をめくられるのです。先生のスケッチブックは学術的、または絵画的な山や、川などの絵だけではありません。あまたの学会やパーティーの様子、参会者の姿、それぞれの方のサインと思いの一言まで、多彩に収録されているのです。

このスケッチブック、なんと三七五冊あると伺



いました。世界を巡り訪ねられた折々の情景が、ふつふつと湧き上がる思いに駆られるのです。単なる言葉より多くの物語が隠されているのです。ある研究者が収集し、培った膨大な情報の集積といえるかもしれません。

ある時のスケッチハイクの折です。叙勲の話が話題になったことがありました。「先生もその対象者になられているのではないですか？」と誰かが不躰に聞いておりました。

「ああ、あれですか、お断りいたしました。何故って、ずっとお上に楯突いてきたものが、お上が勲章をくれるから戴くなんて理に合わんでしょ」ということでした。

その日からも随分年月が過ぎました。

## 八木先生のスケッチブック・ ものを見る

かつて協会職員として八木先生のかばん持ちを勤める

三木 昇

「三木君 ちよつと ここ」と両手を前に上げて写真アングルを示す八木先生。「ハイ」それを撮影するのが私の役目。これが八木先生との調査風景でした。先生は現場につくとまずはひと睨み。そして、例のスケッチブックを開いてスケッチをはじめられる。あらかた描かれると一声かかる。覚えのための写真撮影です。これが先生とのいつもの調査風景でした。

先生とは天売焼尻国定公園への昇格調査、道南の檜山道立自然公園調査などいくつかの調査にお



檜山道立公園の調査にて、先生愛用のハンマーと掘り出された鷹の目硫黄。

これは奥尻島にかつてあった大規模な硫黄鉱山の跡を訪ねたときです。調査時点ではその鉱山の跡を示す平らな場所があるだけ、強酸性で植物の生えない採掘跡、先生は道なき道、崖をトラバースして台地の採掘跡へ、「ここですね。」そして「このあたりでどうか」とハンマーを突き立てるとこの硫黄が出てきました。「おおっ これですよ。これがねっ純度の高い硫黄で、鷹の目のような色ということから鷹の目硫黄と言っているんですよ。」「じゃ ちよつとこの写真を」ということで撮影したのがこの写真です。

供させていただいた。北海道自然保護協会が道庁から調査委託を受けて仕事をしていた頃である。道庁も今からすると北海道の自然について把握し、その保護について積極的であったように思われます。

先生のスケッチブックはつとに有名で、いつもこれを携えておられました。調査の時はもちろん、講習会の講師のときなどは夜の懇親会には必ずこれが出てきて、参加者一同の寄せ書きに一筆入れられた方も多かったと思います。それを後にコピーをお回しくださった。「ひとつ今夜は楽しくやりましょう」先生の乾杯の声から始まり、人と人との出会いが宴席には慈愛に満ちた笑顔がありました。懐かしく思い出されます…。

先生との一番の思い出はこのスケッチブック。単に絵がうまいというだけではなく、科学者として現場を把握しそのエキスをわかりやすく描く。この眼力を養うことと描く技量がフィールドワークには不可欠と学びました。大地の形が地表で起こるさまざまな自然の営みを規定している。中身の石の質、そしてそれらが受けてきた地球の力、長い時間のうちに起きた隆起侵食まで思いをいたさないといけない。私たちがみている植物はその大地の表現形ということなのです。ひと睨みして目の前の風景を把握する。「おもしろいですねえ」と先生の声が今も聞こえるような気がします。門前の小僧で私も少し描くことに心がけてはいませんが、それを覗きこんだ先生、「君は形にとらわれすぎているね。」とおっしゃられる。ウームそうかと思えばなかなか先生の域には達せず。山の形を描いて斜面の植生を書き込む時、先生のこと

合口堂

元北海道自然保護協会長、北海道大名誉教授

八木 健三さん

「はい、はい。」昭和9年、月1日  
北海道・札幌警察交際の会館で、黒  
龍国立公園内の環境保護設計に反対す  
る自然保護団体の話し合いは、すく  
よ10分ばかり切れた。立ち去るとす  
る交際館前を急ぎ、手をあげて追っ  
た後援団に報告している。  
「行動力と熱意。人々とのつなが  
りを大切にすること、あのときの熱意が  
当時の世界自然保護につながった。」  
当時、佐藤好太郎の雄弁リーダーと  
して知られていた「自然保護団」の佐藤  
さんには、驚きもある。

## 自然保護リーダー

「それは、環境保護の先頭に立ち切っ  
た。」「それは、環境保護の先頭に立ち切  
った。」「それは、環境保護の先頭に立ち  
切った。」「それは、環境保護の先頭に  
立ち切った。」「それは、環境保護の先  
頭に立ち切った。」「それは、環境保護  
の先頭に立ち切った。」「それは、環境  
保護の先頭に立ち切った。」「それは、  
環境保護の先頭に立ち切った。」「それ  
は、環境保護の先頭に立ち切った。」「  
それは、環境保護の先頭に立ち切った。  
」

## 現場第一の自然保護リーダー

[illegible]

やぎ・けんぞう  
7月18日死去（慢性心不全）88歳  
8月6日お別れの会

知置の北海道大学キャンパスで翌日07年6月、遺体発見

朝日新聞 2008 年 9 月 26 日(金)掲載

八木先生との思いで

ナキウサギふあんくらぶ代表  
市川利美

八木先生と初めてお会いしたのは二〇年ほど前。新聞の小さな記事を見て、ゴルフ場がいかに環境に有害かを視察するツアーに参加したときのことである。ツアーが終わってバスを降りるとき、道協会の会長だった先生は私と夫の手を握っておっしゃった。「君たちは夫婦だから、ぜひ、AB会員になちなさい」。笑顔でこんな風に勧誘されて入会した人は数えきれないほどいるだろう。その頃は、先生の北海道の自然を愛する気持ちがそのまま、道協会の魅力となっていた。

それ以来ずっと、私の人生でもっとも尊敬できる人は先生だった。とにかく現場にかけつける「現場主義」、良いと判断すると迷わず動き出す「行動力」、子どものような「好奇心」、偉い先生なのに自分の知らないことや間違いはすぐ認める「素直さ」など。見習うことが未だに難しいことばかりだ。そして、最も素敵なのは、先生の「純粹な心」。名誉、権力、私利私欲、保身……などは微塵もなかった。一点の曇りもない心……。それは奥様の信子さんを愛する心と同じだった。

先生とは、士幌高原道路を共に闘つた（共に）は私の主観。先生はナキウサギふあんくらぶの二〇〇〇番目のメッセンジャー（会員）にもなつてくださった。先生が原告団長となられたナキウサギ裁判では、法廷の原告席にぬいぐるみのナツキーがずらつと並んだ。ありえないことである。（先生のお宅のナツキーは信子さんがそつとひとつ

ぎに入れてくださった。

私と夫がコロラド州ボルダー市で勉強していたとき、先生と信子さんが来てくださり、イエローストーンやロッキーマウンテン国立公園などをご案内できた。思い出は尽きない。

今の道協会に生き活きた行動力が薄れているのは残念である。私の敬愛した先生はもういないが、もう一度、魅力ある道協会に戻ってほしいと思いつけている。

# 八木健三さんの想い出

NP O 法人 北海道雪崩研究会会長  
小山 健二

「原告は口頭弁論を意見や証拠を示しながら行なってきましたが、被告側は準備書面の提出のみなので、意見を発言してほしい。多くの傍聴人に對して配慮する裁判にしてほしい」。この発言は、一九九六年八月に提訴した大雪山ナキウサギ裁判での八木健三さんの発言である。九八年七月の第九回口頭弁論、原告二一名の団長だった八木さんが、裁判長へ要望の意見書を提出したのです。裁判長の返答は、「この裁判は私、裁判官のために行っているので、原告の指摘の通りには進められません」。八木さんとお付き合ひされていた方々はお解かりのことと思いますが、八木健三さんの目線や日常の思考が、権威主義などではなくいつも仲間と共にあったのです。この時の八木さんの発言には、私達原告達も少しビックリしましたが、裁判長はもっと驚いたことでしょう。

親子ほどの年の差がある私と八木さんのお付

き合いは、自然保護活動を通じてでした。

私の運転する車で日高の山や土幌高原に通ったものです。一九八四年七月から始まった日高セミナーでは、私が運転するマイクロバスの座席の一番前に座り、そして、十勝を往復する車では、助手席に必ず座ったものです。長距離運転ですので色々とおしゃべりが弾みました。八木さんご夫妻が媒酌人を務めたご夫妻が、わたし夫婦の結婚式の媒酌人だったり、次男の健二、三男の健三、と笑い合いました。座席の一番前に座るのは理由がありました。八木さんのヒザの上には何時もスケッチブックがあり、スピード運転中の車から観える景色を素早く描くのです。スケッチの速描きを坂本直行さんと語り合ったことを教えてくれました。八〇年六月に東京で開催した「日高横断道路を考える」集会は、坂本さんと八木さんのお二



1997年6月20日 白雲山山頂にて。  
ナキウサギ裁判原告団・弁護団現地合同調査隊

人が東京まで行かれての訴えの講演会でした。その甲斐があつて、一月には大石武一・五十嵐広三・美濃部亮吉など七政党一二人議員が「日高山脈を考える超党派自然保護議員連盟」を結成しています。

ちなみに、ペテガリ山荘での第一回日高セミナーの講師は八木さんでした。一九九〇年九月に開催した第七回日高セミナーは十勝幌尻岳にご一緒に登りました。その頂上から描いた日高山脈の絵画は、「八木健三先生お別れの会」で配られたものです。実はこの絵は二枚描かれていて、その一枚が私の手元にあるのです。絵は大きく横幅が二m二〇cmもあるものです。この絵は、八木さんが北海道大学ワンダーフォーゲル部の顧問に就任された年に同部に入部された大内倫文さんがオーナリーの「つる」に飾ってあります。八木健三さんが懐かしく思われる時は、どうぞビールなど飲みながらご覧下さい。

## 八木先生の電話

北海道大学大学院地球環境科学研究院教授

小野有 五

夜おそく、受話器をとると、「八木ですが」と、最初の「や」が一番高くで、だんだんに音程が下がっていく、八木先生独特のお声が響いた。そういうお電話が、いくどもあつた。一九八八年から一九八九年にかけてのことである。当時、北海道開発局は、千歳川の治水対策として、大きな自然破壊をとまなう「千歳川放水路計画」を推進していた。北海道自然保護協会は全面的にこれに反対、

八木先生はその代表として、開発局と鋭く対峙しておられたのである。

私は一九八六年七月に北海道大学の大学院環境科学研究科に助教授として赴任したばかりであった。一九八一年にヒマラヤに調査に行き、研究のためとはいえ、現地の環境を壊してしまった経験から、それまでのように純粹に自然だけを研究してはいけなかつたと思つたことが一つの転機であつた。このことは岩波ジュニア新書の『ヒマラヤで考えたこと』にも書いた。しかし、そう考えて北大に來たものの、もともと日高山脈の水河地形を研究していた人間だから、北海道に來たらやはり研究のほう面白くなつてしまひ、おまけにたくさんの方の大学院生の指導や、北極圏での調査などが重なり、赴任して数年は、自然保護運動などやる暇もない、という状態だったのである。

八木先生からひんぱんに電話がかかるようになったのは、ちょうどそういう頃であつた。

内容は、放水路計画の問題点に関わる科学的なご質問で、時間をかけて調べてみないと、いくら地形が専門といつても、すぐにはお答えできないような難しい問題ばかりであつた。

一般的にはこういうことだと思いますが、と説明して、すみません、今は時間がないので、それ以上のことは……と、運動への協力を求める八木先生ののご依頼をすげなくお断りしたことがいくどあつたのだろうか。

いま考えると、ほんとうに失礼なことをしてきただけだと思う。しかし八木先生は、なんと断られても、しばらくすると、また別の問題で電話してこられるのであつた。

「また八木先生からよ」と、妻も、まだお会いし



たこともなかった八木先生のお声を覚えてしまったほどであった。

私が根負けしたのだろうか。いきなり反対するのではなく、まず客観的に、環境科学の立場から放水路計画を調べてみようというやうく決意したのは、九〇年になってからのことであった。八木先生は、その前年、長く務められた自然保護協会の代表を退かれた。あとから考えれば、同じ地球科学の研究者として放水路問題を引き継げと、八木先生から託されたということであつたかもしれない。

九〇年代の一〇年間は、放水路問題に明け暮れて終わった。私の人生はそれで決定的に変わってしまったが、放水路を中止させることができたのは、日本の自然保護運動にも決定的な意味をもつたと思う。それは、なんと拒否されてもあきらめない、八木先生の自然保護にかける情熱のおかげであつたともいえるよう。

八木先生のお電話には、ひとりの人間の生き方を変えるだけの力があつたのである。

## 八木先生の思い出

松野 誠也  
自然観察指導員

私は、北海道自然保護協会と日本自然保護協会共催の自然観察指導員講習会を知りまして、その第一回を受講しようとしておりました。だが勤めの都合で参加できなくなりました。もし実現しておりましたら八木先生と自然観察指導員同期ということになったのですが。そうして、養老牛で行

われました第二回を八木先生方のご指導で受けたのです。その数年後、仲間の人々と北海道自然観察協議会をつくり今日にいたっております。この間先生からは多くのご教示をいただき大変お世話になりました。会が行います自然観察会にはご多忙なところ会長として度々参加下さいました。なかでも滝野自然学園で今でも続いております子供の夏休み中に行う親子参加形式の一泊観察会には講師として参加下さいまして、一日目の夜に学習室を使いその時々の北海道における自然保護にかかわる問題を子供にもわかりやすく話して下さいました。ナキウサギ裁判のさなかにはスライドを映しながらなぜ士幌高原道路を造ることに反対するのかということの説明されていたことが鮮明に思い出されます。

札幌大学の公開講座で先生は「北の自然を守る」というテーマで話されておりますが、そのしめくくりで信州伊那市での小学生時代をふりかえり「家の裏の岡に杉や雑木の森があり、双眼鏡を下げて鳥を見に出かけた。こうした自然の中で少年時代を送ることができ幸せだった」と述懐されております。この様な思いが子供達への期待を込めたお話しにつながっていたのだと思います。

会場になった滝野自然学園は札幌創建の歴史を語る物であり札幌現存最古の木造校舎ですが、これが廃止されるという話があり、その存続を強く願った私達は札幌市と話し合いを行いました。理解を得られず、最後の手段として八木先生にお願いをし、教育長に直接申し入れていただく事を考えました。私がその担当となり先生に同行して事の経緯を説明し、先生からは是非残してほしいとの申し入れをしていただきました。その後廃止し

ないこととなり現在も山と川が一体となった身近かな里山的な存在として使われております。

先生が会員になっておられた「歩々の会」の画展へ今年も出かけましたが、先生を偲ぶコーナーには数多く残されたスケッチブックの一部が展示されており、その一冊に一九九〇年第一回滝野の自然に親しむ集いの寄せ書きがあり、先生が「僕の早書きスケッチは坂本直行さんからの伝授だよ」と言っておられたことを思い出し、なつかしさが込み上げてまいりました。

先生との思い出はまだまだ尽きません。協会企画の美林ツアーではツアー先の幌延の原発廃棄物処理問題を現地に立ち専門家の立場から強い口調で反対された事、ナキウサギ裁判原告団長としてのご活躍、夕張岳スキー場反対運動などがつぎつぎと脳裏に浮かんでまいります。

先生、いろいろとありがとうございました。

## 八木健三先生、安らかに

リゾート・ゴルフ場問題全国連絡会  
神原 昭子

いまから二〇年前になります。私が夫の転勤で東京から札幌に移り住んでしばらくたったころ、当時は北海道自然保護協会の会長だった八木先生に、はじめて呼び出されました。「ゴルフ場の農薬問題について教えてほしい」という頼みでした。そこで私は消費者運動の立場から、農薬や化学肥料、地盤凝固剤などについてくわしく説明しました。「よくわかった」といわれた後で、当然のごと

く、「自然保護協会の会員になりますよね」。八木先生の氣迫に押されるようにして、その場で会員になったのです。一見、強引とも取れましたが、八木先生はその後、強い味方となって、応援を続けてくださいました。

それ以来、自然保護協会の仲間としても、活動させていたのです。とくにそれぞれの自治体のゴルフ場やスキー場などのリゾート開発予定地には、八木先生も積極的に調査に加わっていただきました。とくに一九八九年から九四年ごろまでは、リゾート開発の波に翻弄されていたからです。

全国レベルでは『リゾート開発への警鐘』という本を、私たちの『リゾート・ゴルフ場問題全国連絡会』が一九九〇年二月に緊急に出版したのですが、そのときには八木先生の論文を、許可を得て、採録させていただきました。この「北海道におけるリゾート開発と自然保護」と題する論文は、『日本の科学者』の一九八九年一月号で紹介されました。

一九八七年六月に「リゾート法」が施行されると、ほかの府県といっしょに北海道も開発に名乗りをあげました。審査の末、「富良野・大雪リゾート地域基本構想」が通ったのが一九八九年四月。同じ四月には、すでに北海道自然保護協会は、一市七町一村にわたる「重点整備地区」の現地視察を行っていました。八木先生の論文は、全国のリゾート開発に対しても、大きな警鐘となったのです。その後も八木先生と北海道自然保護協会にはいろいろな問題がありましたが、私もできるかぎり参加しました。

一九九六年八月二六日、北海道の自然保護団体は、知事を相手に、裁判を起こしました。この裁判は、大雪山国立公園の貴重な生態系を破壊する

士幌高原道路の建設は違法な公共事業であるというもので、そこには氷河期の生き残りであるナキウサギが生息していました。そこでこの裁判を「大雪山のナキウサギ裁判」と名づけました。八木先生はこのナキウサギ裁判の原告団長としてめざましい活躍ぶりでした。時にはユーモアをまじえながらも、真剣に立ち向かわれたのです。

一九九七年一〇月九日、大雪山国立公園の白雲山トンネル予定地の上で、自然環境の証拠調べが行われました。実際に、札幌地方裁判所が白雲山へ登山をしての現地検証ということで注目を集めたのです。当日は、裁判長を含む裁判所側九人、弁護団と支援者を含む原告側四〇人、被告側五人、それに報道関係者を合わせた八〇人以上が、一列になって登っていきました。山頂では、歩けないほどの強い風を避けた大きな岩のかげで、裁判長たちに八木先生は、原告団長の地質学者として、その地形の内容をわかりやすく説明しました。

一九九九年三月、知事は士幌高原道路の建設を「中止」しました。八木先生を先頭に、皆で「乾杯」。昨日のことのように思い出されます。

八木先生、今は安らかにお休みください。

## 八木先生の思い出

清水 晶子  
植物画家

それは確かでもとても温かいものです。

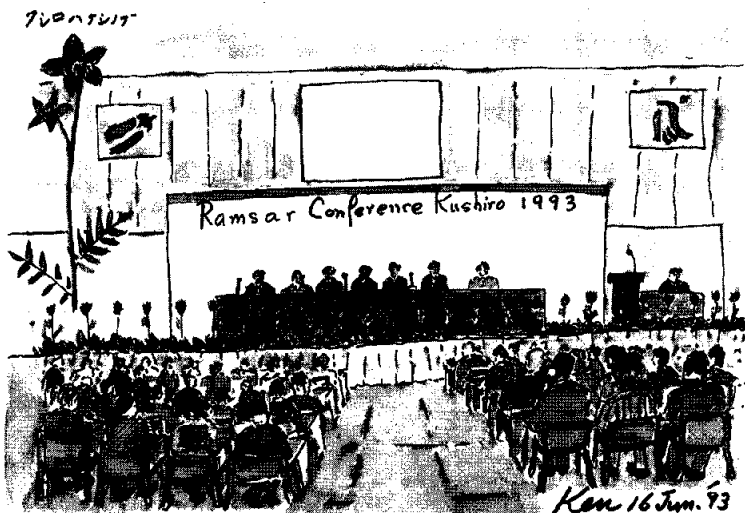
初めてお会いしたのは自然観察指導員講習会の折でしたが、その後も自然保護の集まり、平和学会、核兵器廃絶の集い、原発の勉強会などお誘い

を受けて参加させていただきました。その都度感じたことは、こんな人間的な学者がいるーという驚きでした。

北大を退かれた後つとめられた北星学園大学退官の折の講演にも伺いました。そこでも学んでこられた道のりと、平和を求めて行動する学者としての先生を深く知りました。

私が北海道植物画協会を設立してからは作品展を毎年見に来てくださり、特に一〇周年、一五周年の記念展では私たちがますます元気になるスピーチをして下さいました。

私も夫婦が札幌から網走の森の中にアトリエをつくり、ささやかなオープンングパーティーを



催した折にも遠路いらして下さり、「大手デベロツパーはこのアトリエをみならうべきです。自然と共生する森の家の暮らしはこれからの住まいのモデルになるでしょう」とご挨拶して下さいました。ちょうど網走湖の水の上にアザラシが数頭寝そべっていた時でした。先生はこんな近くに海獣がいると、さっそくスケッチされていましたのでスケッチ帳の一九九一年一月の頁にはその折の絵があると思います。人と人をつなぎ行動する温かい心の山羊（八木）先生。目に見えない沢山の贈り物をありがとうございました。

## 八木先生を想う

ノルウェー極地研究所  
太田 昌 秀

信州の田舎の地学の先生がいらない旧制中学で、趣味で鉱物や化石に関心を持ち始めていた私に、それらが地球科学の出発点であることを教えてくださったのは、八木健三先生の父上、貞助先生でした。その頃健三先生は、アメリカ留学中だったでしょうか？ 私をはじめ健三先生の講義をお聞きしたのは、一九六〇年にコペンハーゲンで開かれた万国地質学会報告のお話でした。その後先生は北大へ転任され、野外地質学が主流だった北大に、実験岩石・鉱物学の基礎を築かれました。そんな先生が身近におられたのに、私は山を歩いて地質図を作る行き方を選びましたので、物理・化学の基礎が不足し、その後の岩石学の進展についていけず、この年になるまで「頭の弱い子・元氣な子」で過ごすことになってしまいました。

私は縁あって東京オリンピックの年（一九六四年）にオスロへ留学する機会に恵まれ、現代岩石学発祥の地のひとつで、大学で使った教科書の著者のもとで勉強しましたが、ここでも山歩き地質学から抜け出せず、新しい方向へ進むことができませんでした。その後私はこの国に職を得て、今年で七六才になる人生の半分（三八年）を、この国で暮しています。

八木先生は私たちのオスロの狭い家を一九七四年と、八六年にお訪ねくださいました。二度目の時は奥様と一緒で、狭いところにお泊りいただき、今にして思えば赤面の至りです。そんな時先生はいつものスケッチ・ブックを広げられ、食卓から見下ろすオスロの街を手際よく描かれました。その時の水彩画が今も我が家の居間に掛かっています。

先生の絵はとても明るく爽やかで、絵の対象への先生のやさしさが素直に表れています。先生は仕事の中では自然と厳格な論理で対応されていた一方、絵に表れているような温かい気持ちでも自然を見つめておられました。一九九五年には先生と奥様の「二人展」を拝見することができ、奥様の人形の気品のある大らかさに、深い感銘を受けました。このようなお二人が育てられた自然への愛が、先生の自然保護活動の基にあった、と拝察しています。

二〇〇七年春に旧北大理学部の博物館で開かれた「科学者のフィールド・スケッチ展」には、八木先生外の諸先輩たちの絵と一緒に、私のものも展示していただきました。これからも先生の大切な気持ちに学んで、私も絵を続けていきたいと思っています。お名前を思い出すだけで、心が明

るく温かくなる八木先生です。

## 八木先生の思い出

（社）北海道自然保護協会常務理事  
福地 郁子

八木先生と同じ町内に引越しをして早くも三年がたちました。引越してまもなく、自然児の息子が動物や野鳥などを通して起こすドラマが新聞や、学研の「一年の科学」に載ったのを機に、わざわざ家まで来られて自然保護協会の入会を強力に勧められました。

そのころ先生は北大退官後、北星学園の先生をされている時であり、町内（藻岩下町内）の会長さんも三年間されてました。

自然保護協会会長になられて間もない一九八一年の夏、石狩川流域を中心に大規模な水害が二度続き、町内を流れる山鼻川の決壊で一時、町内に入る道路が不通になり、下の幹線道路国道二三〇号線も冠水するほどの被害が出ました。先生は町内会長として即刻被害を取りまとめ、市に報告されました。

その水害後、新聞報道などで千歳川放水路計画が発表され、自然保護協会のほうへ開発局河川課長が説明に来ましたが、なぜか理事でもなかった私もそこに同席いたしました。説明に納得のいかない先生は即時、協会職員だった三木昇さんと私の三人で朝早くから夜遅くまで一日がかりで千歳川放水路計画地の現地調査に行きました。ウトナイ湖サンクチュアリ大畑レンジャー、千歳自然保護協会門脇会長、野鳥研究者の三浦二郎さんなど

と計画どおりを実踏され、あまりにも自然に対する無謀な計画に驚いておられました。その後各方面に働きかけ、ご承知のように二〇数年掛かりでしたが千歳川放水路計画は中止されました。町内の暴れた山鼻川の改修でも町内会長として極力、木を切らずに、そのため一部は暗渠になったところもあり、なんとか自然を残してという考えが伝わってきました。

先生が藻岩下町内会長だった時は手書きの町内会報「藻岩だより」を出されており、「犬の糞は飼い主が持ち帰りましょう」とワンちゃんの困った顔の絵、藻岩山の麓という場所柄「草花は採らずにみんなで大事にしましょう」と草花の絵を入れたものなど楽しい会報でした。私も婦人部副部長、部長として三年間先生とともに町内のお手伝いをさせていただきました。

一九八四年以降、私も協会の理事になってから知床伐採問題、千歳川放水路計画、土幌高原道路などで悩まれ、奮起し行動する先生を間近にみってきました。

私が担当の自然観察指導員の講習会、美林ツアーなど先生同行で全道各地を訪ねましたが、美林ツアー参加者が全員バスに乗り、いざ出発だというのに待ってもらいスケッチをしていた姿が思い出されます。

同じ場所に住んでいるのですから当たり前ですが、先生とは家を出てから戻るまで大体が一緒です。実の父とも、こんなにも一緒に小旅行をした事がありませんでした。協会の仕事以外でもいろんな所へ誘っていただきました。本当に楽しい思い出ばかりです。

晩年、「あのですね。…」とよく電話がかかって

きた時の声が今でも耳に残っております。

## 八木健三先生と北海道大学ワンダーフォーゲル部とスキー

北海道大学ワンダーフォーゲル部OB会

平 沖 敏 文

八木健三先生は正式には一九六八年より一九七八年まで北海道大学体育会ワンダーフォーゲル部顧問をされ、部の行事に頻繁に参加されました。

四月のバラダイスヒュッテにおける新人歓迎会では、コンパで二日酔いの学生達をしりめに涼しい顔で残雪を踏みしめ、手稲山に登りました。そして先生は、山頂において指呼にある札幌近郊の山の成り立ちの講義を行うことが恒例でした。

先生はスキーが大好きでした。当初米国製ヒツコリー合板を使われていましたが、山スキーには重たいとこぼされていました。そこで部員とOB OGが先生の還暦祝いにグラススキー一式をお贈りしたところ、軽くて快適に滑走できると大変喜ばれ、ニセコ五色温泉における部の冬合宿やOB合宿に毎年のように参加され、現役部員やOBと交流し、山スキーを楽しまれました。先生の滑りはOBのUさんにより8mm撮影され、DVDに残されています。

ある年、山岳部元顧問の橋本誠二先生と山スキー部顧問の水谷寛先生も冬合宿に参加されました。両先生ともスキーの達人と聞いていたので、筆者はこれを実見する得難い経験をしました。橋本先生はパイプを吹かしながら蒸気機関車のようにベラスター流で滑り、水谷先生は踵の強い蹴

り出しで回転し、その間を八木先生が大きなターンで滑走しました。夜はウイスキーをなめながらスキー談義に花が咲きましたが、そのそばで八木先生はスケッチに色づけしていました。

退官を控えた一九七七年に、次期顧問の久田光彦先生と一緒に冬合宿に参加されました。恒例の餅つきの折、足元が滑り八木先生の杵が相の手をしていた久田先生の頭部に当たり出血したので、久田先生は救急車で蘭越町診療所に行き縫合治療を受けました。翌日には久田先生はもう大丈夫といい、頭部に包帯を巻いて吹雪の中を二トヌブリまでのツアーに参加され、一同一安心したのでした。この事件は部内で後々まで語り継がれることとなりました。

北大退官後も先生はOBとともにしばしば山スキーを楽しまれました。一九八二年春には、OB連一〇数人と共に羊蹄山に登り、頂上でビールで乾杯し、ザラメ雪を大滑降しました。一九八六年正月明けの冬合宿に参加された際、見通しが悪い中、先生は雪壁から道路に落下して踵を骨折され



1982年4月羊蹄山にて

たので、同行していたNさんとTさんがケアして病院に運びました。懸命のリハビリ後、この夏には先生は杖をつきながらも奥様とご一緒に北米を横断旅行されました。当時カナダのカルガリーに滞在していた筆者は、ご夫妻を数日間カナディアンロッキーに案内しました。スケッチをのぞきにくる観光客との交流も楽しい思い出でした。

先生の長年の鉱物学・岩石学分野における功績に対して、カナダ・ブリテッシュコロンビア州内のある山地が「Yagi Range」と命名され、この地質図が「お別れの会」のおり展示されました。

## 八木先生の思い出

北海道アウトドアガイド・自然観察指導員

木村 マサ子

エピソード一

八木先生に初めて会ったのは一九八五（昭和六〇）年の八月、前田一步園が阿寒湖畔で開いた森の案内人育成のための講座「第一回自然セミナー」に参加した時だ。受けた講義は、地球が誕生した様子や北海道の山の成り立ちについて。大きな声で、体全体で話してくれたのが印象的だ。

翌日は雌阿寒岳の登山実習。先生は登山開始するや腰に下げているハンマーで、足元の石を拾っては、けたたましく叩き割ってルーペで見せてくれた。登山道の環境が変わるたび、高度を増すたびに繰り返されたので、私たち数人は先生を追い越して先に登り、眺望のいい場所景色を楽しんでいた。間もなく追いついた八木先生は「専門の講師先生が沢山いて、こんなチャンスはない。研

修では講師から離れるな」と一喝した。

山頂での昼食時には、おにぎりのパックを天にかざし「これは昼飯を入れた入れ物で、入れ物はゴミではない。だから持ち帰るのだ」と教えた。

この出会いと教えが、今の私の活動の原点になっている。

エピソード二

一九九八年五月、函館山で自然観察指導員の研修会が開かれた。この時、夫が磯舟を出し、函館山を海から一周して見てもらうことにしていた。当日は快晴で青い海に新緑の函館山が眩しいくらいだったが、舟を出す頃から西風が吹き出した。このような天候は最も危険とされ漁師は舟を出さないのだが、折角の機会なので舟を出してみた。うねりが大きくなり、突風が巻き込んで舟が時々傾いた。同乗した福地さんと与那覇さんは怖がり舟縁にしがみついていたが、八木先生は我関せずとばかり海上からの函館山をスケッチして楽しんでいた。我々が怖がっている間に、先生はスケッチを完成させていたのだ。無事舟を降りてから、舟上での澄ました八木先生の様子を思い出し三人で大笑いをした。

エピソード三

二〇〇〇年頃、函館で高層マンションが立ち並び、私の町でも建築計画が出された。計画された土地は、湿地なので周辺住民から反対運動が起こった。建設の説明会で建設側から出された地質調査のデータは、私たち素人には意味が分らないものであった。

早速、八木先生にその内容について何うため調査データを送った。八木先生は、札幌で地質を調査している教え子を訪ね詳細に聞いてくれた。そ

れを詳しく私たちがわかるよう、図に描いて送ってくれたのだ。この図は、函館山の断面と共に地質の歴史が伺えるよう描かれているため、私が「函館山の誕生」について解説する際、今も役立てている。

阿寒湖畔で会って二〇年、先生と毎年のように会う機会があった。そのたびに私を励まし応援してくれた。二〇〇六年の前田一步園賞の授賞式に出席いただき、大変喜んでもらった。八木先生から沢山のことを習った。そのなかでも先生の活動精神は忘れることなく受け継いで行きたいと思っている。八木健三先生、ありがとう。

## 八木健三さんのお別れに添えて

十勝自然保護協会理事  
及川 裕

「二〇世紀最後の新春にあたりご一家のご多幸を祈ります。

士幌高原道路計画は「時のアセスメント」により中止が決定し、ナキウサギ裁判は実質勝訴をもって終わりました…

また、十七年間反対運動を続けてきた、千歳川放水路計画も中止が決定しました。

自然環境問題に、一つの明るい方向が見えてきたことを嬉しく思うとともに、これが全国に広がっていくことを期待する次第です。

二〇〇〇年元旦

折角問題は解決したのに 貴兄が昔の元気を失っておられることを心配しております。

共に前向きに行きましょう』

これは二〇〇〇年に戴いた八木さんからの賀状である。

八木健三さんに初めてお目にかかったのは手稲宮の沢の坂本直行さんのお宅だった。

たしか直行さんがネパールのスケッチ旅行から帰られた翌年で、一九六八年頃であるから、いまから四〇年以上前のことである。

眼光鋭い直行さんと、温厚そのものという感じの八木さんは、終始笑顔で、お二人とも大きな声で「歩々の会」のこと、「知床伐採問題」のことなど話されていた。

直行さんは北海道自然保護団体連合の資金造りに、カレンダールの原画や花の絵はがきなどを無償で提供戴いたり、単身ザックを背負い環境庁や林野庁など関係省庁を廻られ、大雪、日高をはじめとする北海道の自然保護を訴えられたのだが、一九八二年五月二日、膀胱ガンで逝かれた。

八木さんは「直行さんの跡継ぎは、私がやる。」と言われ、北海道自然保護協会会長を引き受けられたと聞いている。

以来、知床伐採問題、千歳川放水路問題、そして土幌高原道路計画、日高横断道路計画など、息つく暇のない自然破壊公共事業に対し、精力的に反対運動の柱として取り組まれた。とくに土幌高原道路問題の三〇年に近い関りでは、大変ご苦勞なされた。

その自然環境調査は、北海道自然保護協会が担当し、白雲山トンネル、駒止めトンネル、東ヌプカウシ山トンネルの三ルートとも、この地域の貴重な自然を破壊するので、どうしても必要なら東

ヌプカウシ山南麓ルートを検討すべきだ、とする付帯意見を主張された。

かねてから十勝自然保護協会は、その真意を道協会に照会していたが、解答を得られていなかった。

一九八二年九月釧路湿原の国立公園指定調査に來られていた八木さんを訪ね、真相をお聞きすることができた。

これは後に、一九九二年四月二二日付北海道新聞（夕刊）に「専門家の見解を無視」のタイトルで掲載され「調査を引き受けたのは、結果に従うという道の約束があつたから。結論は科学者の調査を尊重せずにゆがめたもので、大切な時に逆用されて悔しい。」と話され、横路知事の工事再開決断を厳しく批判されたのである。

岩石山の山腹に刻まれた見苦しい傷跡のように、紆余曲折を経た土幌高原道路計画は、土幌町ヌプカの里北部から糖平湖南岸に至る白雲山をトンネルで貫く「全線トンネル案」を自然環境保全審議会の答申により、環境庁は、いとも簡単に、一九九五年公園計画として承認してしまう。

強引な行政の流れを引き戻すべく、一九九六年五月には、大石武一初代長官を筆頭に、八木さん、道協会会長俵さんと一二万筆の反対署名を携えて同行し、岩垂環境庁長官に陳情に行った。だらしない長官には全員失望させられた。しかし、その折八木さんにご馳走になったうな重の味と、おもむろに取り出された先生の塗り箸は、今でも目に浮かぶのである。

岩石学の権威であられた先生の健脚ぶりは一九九七年一〇月雪の舞う山上裁判の折も、遺憾なく

発揮され八〇数名の一行をリードする様子は、山岳のベテランである二井田さんすら驚かされていた。

昨年七月二六日北海道新聞朝刊一面を見て愕然とした。一八日八木健三さん九三歳の訃報である。一日中ぼううつとして、なにも手につかなかったが、夕方やはりお悔やみを申し上げねばと藻岩下へ電話をした。

奥様の澄んだお声は、意外と落ち着いておられ、九月六日のお別れ会には是非にと言われた。

昨年二月札幌での大橋元道議出版記念会でお会いしたのが最後であつた。

